

# 太宰治「乞食学生」論

——タイトル命名をめぐる一考察——

片木 晶子

〔要旨〕一九四〇年『若草』に連載された太宰治「乞食学生」は、印象深いタイトルが付けられておりながら、作中で「乞食学生」という単語は一度も言及されることがなく、やや謎めいた印象を残した作品である。本稿は、作品発表の二年前に同名の映画「乞食学生」が日本で公開されている点に着眼し、この映画との関連を見出しながら、本作のタイトルが「乞食学生」であることの同時代的な意味を示そうとするものである。

はじめに、映画「乞食学生」が公開同時代にある程度注目された知名度のある作品であったことを、同時代の映画雑誌や新聞、『若草』の映画紹介など複数のメディアで紹介されたという点から明らかにし、作者もこのタイトルを目にした可能性を示した。

さらに、本作連載同時代の『若草』読者感想欄の調査を行い、タイトルで映画を想起した読者がいたこと、タイトルに関心を向けたコメントが複数寄せられていたことを明らかにした。ここから、本作と映画の関連が読者にも受け止められており、既成のタイトルでもある「乞食学生」という題名が、『若草』読者を惹きつけていた同時代状況を確認した。

太宰作品において、他作品のタイトルを大胆に起用した作品は本作だけではない。本稿では、「女生徒」、「老ハイデルベルヒ」の例も踏まえつつ、こうした命名の手法が、読者に読解の広がりをもたらす効果がある点を指摘した。映画の内容を想定して「乞食学生」を読むと、主人公の迎える結末に大きな落差があり、読者は意表をつかれたであろうと想定される。

さらに、他作品のタイトルを取り込むという方法は、戦時下における隠れ蓑としての役割をも果たしたと考えられ、一九四〇年代、パロディ作品に注力した作家の方向性に通じる姿勢であると結論付けた。

「キーワード」 「乞食学生」・『若草』・映画・タイトル・「女生徒」・「老ハイデルベルヒ」

## はじめに

本稿は、従前の「乞食学生」研究において殆ど注目されてこなかった本作のタイトルについて解釈を試みるものである。

太宰治「乞食学生」は、『若草』一九四〇年七月（第一六卷七号）から一二月（第一六卷一二号）まで六回にわたり連載された。本作は、自信のない小説を投函して自己嫌悪に陥っていた三二歳の作家「私」（三二八頁）が、玉川上水の土提を泳いでいる高等学校生に出会うところから始まる。「私」は、「佐伯五一郎」（三四五頁）と名乗るその青年

と会話を交わすなかで、実家が貧しいがゆえに窮地に立たされている彼の身の上を知り、成り行きで「佐伯」の身代わりとなつて一夜だけ高等学校の制服制帽を身に纏つて映画説明をする約束をしてしまう。「佐伯」と制服を貸してくれた彼の友人「熊本」(三五三頁)と三人で渋谷へ行った「私」は、小さな食堂でビールを飲みながら二人の高等学校生に向けて演説をする。「私」は、失つた青春を取り戻し得たと感じて一人高揚し、「アルト・ハイデルベルヒ」(三七八頁)の歌を歌うも、高等学校生たちとの交流のすべては夢の中の出来事であつたという結末を迎える。

本作は、「乞食学生」という印象深いタイトルが冠されておりながら、作中で「乞食学生」という言葉そのもの、更には「乞食」という単語すら一度も使用されず、また「乞食学生」が誰であるのかも最後まで明確にされることはない。この、やや唐突で謎めいた印象すら残している本作のタイトルは、どのような企図で付けられ、何を意味するものなのか。こうした素朴な問いに一考を加えることが本稿の狙いである。特に、本作と同名の映画「乞食学生」の存在に着目し、同映画との関連の可能性を模索することでこの問題を究明してみたい。

そのうえで、本作を起点とし、太宰の他作品のタイトル命名の問題にも言及する。これらの考察は、時局あるいは掲載雑誌に対する作家の意識を観察する試みにもなるはずである。

## 一、映画「乞食学生」と『若草』

太宰治「乞食学生」が『若草』に掲載された二年前に、本作と同名の映画「乞食学生」(“Der Bettelstudent”)が公開されている。映画「乞食学生」は、ドイツのウーファ社によって一九三六年に制作されたオペ

レッタ映画で、日本においては東和商事の配給によつて一九三八年八月一日に封切された。同映画は、ポーランドがザクセンのアウグスト大王の領地であつた一八世紀初頭頃のクラクフを舞台とし、そこで行われたポーランド独立運動をテーマとしているが、その着想自体は、一八八二年に初演されたカール・ミレッカー(Carl Millöcker)による同名のオペレッタにあるという。

映画「乞食学生」は、公開されるとすぐに『キネマ旬報』や各新聞の映画評をはじめとする複数のメディアで取り上げられた。その評価は、「ドイツ好みのオペレット風な、低俗すぎる脚色が作品の風格を基礎的に損じてゐる」<sup>④</sup>、「独逸映画が最も魅力の無い瞬間を露出したのがこの映画である」<sup>⑤</sup>の意見に代表されるように、いずれも酷評といえるものであつたが、こうして主要な媒体で紹介されたという同時代状況から、ある程度注目された話題作であつたことが窺われる。

映画「乞食学生」の話題性という点で、本稿で特に注目したいのは、『若草』においても映画「乞食学生」が紹介されていたということである。『若草』は、創刊して間もない頃から映画記事に力を入れており、創刊翌年の第二巻一―号(一九二六年一月)以降、断続的に映画評や海外映画の近況など幅広い情報を発信してきた。特に、第一二巻四号(一九三六年四月)以降は「シネ・セクション」と題した映画紹介欄が設けられ、新作映画のレビューを毎号掲載するのが定番となつていた。<sup>⑥</sup>

映画「乞食学生」も、この「シネ・セクション」欄(第一四巻七号、一九三八年七月)において、見開き二頁にわたつて約二〇〇字が費やされ、映画情報からあらずしに至るまでが詳細に紹介されている。

太宰が、同記事を見たかは定かではないものの、「乞食学生」が連載された前後に、太宰が『若草』に複数の作品を寄せていた点には注目し

ておく必要があるだろう。『若草』掲載作品全一〇作を次に列挙しよう。

「雌に就いて」(一九三六年五月)

「喝采」(一九三六年一〇月)

「あさましきもの」(一九三七年三月)

「燈籠」(一九三七年一〇月)

「I can speak」(一九三九年二月)

「葉桜と魔笛」(一九三九年六月)

「ア、秋」(一九三九年一〇月)

「誰も知らぬ」(一九四〇年四月)

「乞食学生」(一九四〇年七月～十二月)

「律子と貞子」(一九四二年二月)

これらの発表年に着目すると、いずれも一九三〇年代後半から一九四〇年代前半という短期間に集中していることがわかる。映画「乞食学生」を紹介した「シネ・セクション」掲載号と同時期に発表された作品こそないものの、太宰が『若草』と深く関わった時期であったことは確かである。

以上より、映画「乞食学生」がある程度話題作であったこと、『若草』誌面でも紹介されたことを踏まえれば、実際に映画を観ておらずとも同映画の存在やタイトル、あるいはあらすじを知る機会は少なからずあったのではないかと推測できる。もとより、同映画は東京の主要四館で封切されたというので、映画公開同時代、東京に在住していた太宰が広告等で目にする機会があった可能性も当然念頭に置いておく必要があるだろう。

ここまで、太宰が映画「乞食学生」の存在を認識した可能性を示して

きた。この仮説が正しければ、太宰は映画のタイトルを知り、それを自分の作品のタイトルとしてそのまま起用したということになるが、このようなタイトルの付け方をしている作品には前例がある。一九三九年四月に『文學界』へ発表された「女生徒」について、津島美知子は、「女生徒」からとつた」との証言を残している。レオン・フラピエ(Leon Frapie)著、桜田佐訳の『女生徒』は、一九三八年九月一日付で岩波書店より翻訳出版された。つまり、作品の同時代に出版された他作品のタイトルが、自作のタイトル命名の決め手となったのである。こうしたタイトル命名にまつわる例を踏まえても、本作と映画「乞食学生」のタイトルの同一性は偶然とは言いがたいと考えられよう。「乞食学生」は、基本的には同映画と原拠のオペレッタにしか使用されることのないオリジナリティの高い固有名詞であるだけに、本作タイトルの着想がここから得られた可能性は十分に考えられるのである。

## 二、「乞食学生」は誰か―『若草』読者の反応より―

太宰が映画「乞食学生」の情報を目にしたかという問題については、前節で述べた内容以上を模索することはできないが、一方で興味深いのは、読者側もこのタイトルに反応しているという点である。

「乞食学生」は、連載同時代、読者から好評を博しており、『若草』の読者投稿欄である「座談室」を確認すると、連載中多くの読後感想が寄せられていることがわかる。その中でいくつか注目すべき投稿があるのを紹介したい。

一つ目は、「乞食学生」連載第一回後に寄せられた、「始終見遁せな

かつた『乞食学生』映画を想ひ出した。これから面白くなりさうだ。(松本・須奈一洋<sup>12</sup>)との読後感想である。文面から察するに、この読者は映画「乞食学生」を実際に鑑賞して映画自体にも好感を持っており、そのうえでタイトルから同映画を想起して、これから展開されていく連載内容に期待を寄せていることがわかる。これは、本作が映画と無関係でないことの証左となると同時に、映画を念頭に置きながら連載を読み進めた読者が存在したことを知りうる感想として注目すべきコメントである。映画「乞食学生」が『若草』内で仔細に紹介されたことを考慮すれば、映画を見た、あるいはあらすじを思い出すことができる読者はこの読者だけではなかったはずであり、またこうしたコメントを読むことによつて、映画との関連を意識した読者も想定されよう。

さらに、本作のタイトルに言及した読者投稿にも注目すべきものがある。「新連載 乞食学生、面白い、はたしてどつちが乞食学生か(小林野菊子<sup>13</sup>)」は、連載第一回の感想として寄せられたコメントであるが、これは本作のタイトルに関心を寄せ、「乞食学生」探しをしながら読み進めていった読者がいたことを示している。また、連載第二回の感想にも、「連載小説「乞食学生」題名先づ風を含んで一息に読み流す専ら新風を持つてなる太宰氏に期待しよう。(竹内生<sup>14</sup>)」とあり、読者にとつてインパクトのあるタイトルであったことが窺われる。このように、「乞食」と「学生」という相反する語を並べた本作の目を惹くタイトルは、映画の存在の認知に関わらず、『若草』読者たちの興味を確かに惹きつけるものであったことが、こうした読者の声から確認できるのである。

これらの投稿内容を踏まえて、本作において誰が「乞食学生」に該当する人物であるのかを検討していきながら、「乞食学生」というタイトルがどのような効果を持つか考察してみたい。

作中で「乞食学生」にあたる人物としてまず想定できるのは、自らを「貧乏」(三四八頁)であると語る「佐伯」といえよう。田舎で小学校の先生をする父の資金では中学校以降の進学が叶わず、同郷出身の代議士を頼りに彼の一人娘の家庭教師をすることで何とか高等学校へ通っているという「佐伯」は、代議士の娘が北海道旅行で撮ってきたというフィルムを自宅で友人に公開する際の映画弁士、つまり「幫間の役」(三四四頁)をするよう依頼されたことに我慢がなくなり、制服を売りはらってしまう。連載第二回で明かされる「佐伯」の身の上を知った読者は、貧しいがゆえに屈辱的な状況に立たされている「佐伯」を「乞食学生」と考えて読み進めていくことだろう。

一方で、連載が進み、第四回になると作家の「私」も「乞食学生」の候補として浮上する。「私」は、職業作家として生計を立てる人物として描かれているものの、「佐伯」の身代わりとして映画説明をしに行く際、「佐伯」の友人の「熊本」に借りた制服があまりにもサイズ違いであるために珍妙な見た目となり、それが苦学生風であることが繰り返し強調して描かれている。読者は、連載を読み進めていくなかで「佐伯」と「私」という二人の「乞食学生」の存在を認識することになるはずである<sup>15</sup>。

こうした展開を踏まえ、読者が映画「乞食学生」の内容を知っていたとすれば、この二人の「乞食学生」の登場にどのような展開を期待するだろうか。

まずは、映画の内容を簡潔に述べておく必要がある。以下に『若草』「シネ・セクション」欄に掲載された映画「乞食学生」のあらすじを要約したものを示す。

クラクフの町はザクセンのオーレンドルフという武人あがりの総督に治められていたが、彼の行った束縛の強い政策は人民に好まれず、街で

はザクセンに対する反抗が高まり密かな祖国独立運動が計られた。その主導者となったのは大学生達で、シモン、ヤンと名乗る二人の愛国者が先導して国外に追放されたスチンツキー王と連絡を取りながらポーランド独立運動をくわだてていた。クラクフ第一の名家であるヴァルスカ伯爵夫人家は、名家でありながら貧しい生活をしており、伯爵夫人は二人の美しい娘たちをより家柄の良いところへ嫁がせようと息巻いていた。ある晩、夫人は姉のラウラと妹のプロニスラヴァを連れて総督邸の饗宴へ出向くが、そこで総督にしつこく口説かれ肩に接吻されそうになったラウラが思わず総督の頬を叩くという事件を起こしてしまう。総督は、この高慢な娘が二度と人前に出られぬようにしようと密かに復讐の計画を立てる。総督は、政治犯として牢に入れられていた乞食学生のシモンとヤンを引きずりだし、シモンをワルシヤワから来た公爵に、ヤンをその秘書官に仕立て上げて姉妹に紹介する。企て通り姉のラウラはシモンに惹かれ、妹はヤンと恋に落ちる。一方、水面下ではヤンが率いる学生反乱軍が着々と準備を進めていた。ラウラとシモンの結婚披露宴の日、総督はシモンが囚人であることを暴露して痛快がるも、総督の予想に反してラウラはシモンを愛していると宣言する。その時、アウグスト王からの使者が到来してポーランド独立許可の宣告が発表される。そして、今まで囚人の乞食学生と思われていたシモンこそ、スチンツキー王の甥のカシミヤ侯爵であることが明かされ、ラウラとシモンはめでたく結ばれるのであった。

映画では「乞食学生」だと思われるシモンが、一時はワルシヤワから来た公爵へと変装しながらも、最後には祖国独立運動を押し進めた侯爵であると明かされる。そして、シモンの身分が種明かしされるとともにポーランド独立運動が成功するという華々しい結末を迎えるに至

る。本作においては、苦学生に身をやつしているという点で、作家の「私」が映画のシモンと重ねられる存在と読める。しかしながら、本作の「私」といえば、そもそも自信のない作家として登場しているうえに、「乞食学生」に扮している間の出来事は全て白昼夢であり、夢から覚めると元の「三十二歳の下手な小説家」(三八〇頁)に戻るばかりである。このように、本作にはあえて映画のタイトルを彷彿とさせる題名が付けられておりながら、そのストーリーは必ずしも連動することなく、そればかりか映画のような華麗などんでん返しを期待しながら読み進めた読者の意表を突くような結末へと導かれていく。

こうしたタイトルの命名は、どのような効果を狙ってなされたものであるのか、また読者はそれをどう受け取って読みうるのか。次章で、本作と同様に、タイトルに他作品からの影響がみられる太宰作品も射程に入れながら、この点について掘り下げてみたい。

### 三、タイトル命名と時局への意識

「乞食学生」の連載と比較的近い時期に、他作品と同名のタイトルが付けられた作品が発表されている。本稿では、先に紹介した「女生徒」と「老ハイデルベルヒ」<sup>(17)</sup>の二作品を例に検討していきたい。

一九四〇年に『婦人画報』に発表された「老ハイデルベルヒ」は、作者によって付された読み仮名を考慮すれば、当然ドイツの戯曲「アルト・ハイデルベルク」<sup>(18)</sup>（‘Alt-Heidelberg’）のタイトルを念頭に置いて付けられた題と考えられる。W・マイヤー・フェルスター（W. Meyer-Forster）作の「アルト・ハイデルベルク」は、ザクセンのカールブルク公国の公子がハイデルベルク大学へ遊学して東の間の青春時代を謳歌

するも、養父の死により若くして大公の座に就くことになり、その後懐かしく再訪したハイデルベルクの変わり果てた様子に憂愁を感じるといった筋書きの物語である。一方の「老ハイデルベルヒ」は、大学生の「私」が三島に滞在し「ロマネスク」を執筆した時の思い出が語られ、「私」にとつて「忘れてならない土地」となった三島に八年後訪れた際、当時の面影がまるで残っていない様子に直面してやりきれない思いを抱くという物語であり、時代背景や舞台、登場人物に至るまで「アルト・ハイデルベルク」とは全く異なるため、一見無関係であるように思われる。しかしながら、主人公が、とある場所で束の間の青春時代を過ごし、後にその土地を訪れると当時の活気が失われていることを知るといふ作品全体の構成は、確かに「アルト・ハイデルベルク」から「老ハイデルベルヒ」へ引き継がれたものである。同音のタイトルを提示するといふこの作品の命名は、作品のモチーフを暗示する役割を担ったものと考えられる。

続いて、「女生徒」は、前述の通りフラピエの小説から着想を得て起用されたタイトルである。太宰の「女生徒」は、題名の如く女学校へ通う一生徒をめぐる物語であり、執筆当時「机辺に在つた」フラピエの作品名が、自作の物語の大枠を適切に示すものであったというのが命名の主な決め手ではないかと想定される。

なお、フラピエの「女生徒」は、刑務所に入れられた母から、一〇歳の娘にあてて書かれた手紙と、その返事という構成で成り立った短編小説である。母は手紙の中で、自分の留守中に娘が行った幼い弟の育児の不手際などについてなじり、娘はその手紙を受けても健気な返事を寄せる。太宰の「女生徒」は、周知の通り有明淑の日記を有力な資料として描かれた作品であるし、作品世界にフラピエの作品の影響が色濃いとい

うわけではない。そもそも、フラピエの作品の主人公とは年齢も異なるうえ、作品世界もこれに基づいているとは言い難いのであるが、父親が不在の心細い家庭環境という設定や、母娘の親子関係が描かれている点など、とどこどころ両作品に類似したモチーフが垣間見える。単純に執筆当時フラピエの「女生徒」が手元にあったという理由だけではなく、この作品に有明淑の日記との類似性も見出したからこそ、「女生徒」という題を起用したと推測することも不可能ではあるまい。こうした緩やかな類似性があることで、フラピエの「女生徒」を知る読者は、両作品の繋がりを期待しながら読み進めることが可能になると考えられる。

「乞食学生」もまた「女生徒」の例と同様に、貧しい学生が出てくることが予想される、すなわち物語の大枠を提示する効果があるタイトルであるが、その語が一般的によく使用される名詞ではなく、固有性の高い単語である点には注目しておきたい。本作の読後感想に、タイトルを見て想像力を膨らませている例が確認されたように、仮に元の作品自体を知らなかったとしても読者の興味を惹きつけるだけの力があるキャラクターな語であるからこそ、このタイトルが用いられたのではないかと予想できる。

さらに、「女生徒」や「老ハイデルベルヒ」とは異なり、本作のタイトル元が小説ではなく映画であるという点にも独自性が見受けられる。太宰は、連載誌である『若草』の読者が、映画へ高い関心を寄せている点を意識して、いわば実験的に、映画とのメディアミックスのような試みを本作において実践したとの見方も可能であろう。

以上の考察から、タイトルを同一にすることは、作品と同タイトルの作品に何らかの接続性があったり、融合したりするのではないかとの期待を読者に抱かせ、作品への興味を誘発するものと考えられる。原拠の

内容を知る読者には、知る人ならではの読みの豊かさが与えられる。元の作品を意識して読むことで、解釈の余地が複数生まれ、読解の可能性が広がるのである。「乞食学生」の映画を念頭において読んだ際に想定される、華麗などんでん返しへの期待は、原拠の映画を知る読者にこそ与えられた読みの可能性であるといえよう。そのうえで、映画の結末とは真逆の方向へ展開していく本作の意外性に面白さを見出すことができるのである。

ここまで論じてきたような他作品と同名タイトルを持つ作品群は、戦時下に太宰が複数執筆してきたパロディ作品とも接続性があるものと考えられる。一九四〇年代における太宰が、時代的な拘束を受けながらも自己の小説の方向性を模索した結果として、『新ハムレット』<sup>(23)</sup>や『新釈諸国噺』、『お伽草紙』<sup>(24)</sup>といった数々のパロディ作品を執筆したことはよく知られている。タイトルのみが起用された作品は、原拠の枠組みに基づいたうえでアレンジが加えられたこれらのパロディ作品とは当然異なるものであるが、自作と他作品との融合に注目したという点には、作家の通底した姿勢をみる事ができよう。つまり、太宰がパロディ作品を手掛けていくようになる過程の先駆けとしてこれらの作品を位置付けられるように思われるのである。

タイトルに他作品の影響をほのめかせることは、戦時下において創作を続けていくための戦略的な工夫の一つであり、時局に対する隠れ蓑であったという見方もできるかもしれない。他作品のタイトル起用が、戦時下において一種の緩衝材としての役割を果たしていたという可能性も指摘して、本稿の結びとしたい。

注

(1) 監督はケオルク・ヤコビー、C・H・デイラーとワルターワッサーマンの共同脚色、主演はヨハネス・ヘースタース、マリカ・レック。独語発声、日本語字幕で公開された。

(2) 映画の原拠とされているオペレッタ「乞食学生」(“Der Bettelstudent”)は、一八八二年二月六日、アン・デア・ウィーン劇場にてドイツ語で初演された。映画は、これをトーキー化したものというが、大田黒元雄の回想には、「乞食学生」もまたドイツで映画化されたが、私の記憶する限りでいふと、その映画の筋はオペレッタのものとはかなり相違してゐた」(『オペレッタの世界』摩耶書房、一九四八年、一八六頁)とあるように、筋書きや結末は原作と異なることが知られている。

(3) 主な映画紹介と批評には、次の記事が挙げられる。「外国映画紹介」(『キネマ旬報』六四七号、一九三八年六月)、「各社試写室より」(同誌六五四号、一九三八年八月)、「外国映画批評」(同誌六五九号、一九三八年一〇月)、「新映画評」(『読売新聞』一九三八年八月五日・夕刊)、「新映画評」(『朝日新聞』一九三八年八月六日・夕刊)。

(4) 『キネマ旬報』六五四号、四九頁

(5) 『キネマ旬報』六五九号、八五頁

(6) 『若草』と映画の関係については、吉田司雄「教養としての映画―『若草』の映画記事をめぐって」(小平麻衣子編『文芸雑誌『若草』私たちは文芸を愛好している』翰林書房、二〇一八年)に詳しい。

(7) 太宰が寄稿している時期の『若草』の編集は、一九三五―一九三九年(第一一巻一―二号)第一五巻一―二号)までは北村秀雄が、そして一九四〇―一九四二年(第一六巻一―二号)第一八巻四号)には北村と花村奨の二氏がその責任者をつとめた。一〇作品の発表期間中、編集者に大幅な変化はなかったものの、本作連載中の第一六巻九号(一九四〇年)頃からは、新体制運動の展開に伴って、特に時局に呼応する内容の記事が増加するなど、誌面は変化していった。

(8) 武蔵野館(新宿)、帝国劇場(銀座)、大勝館(浅草)、東京映画劇場(渋谷)にて一斉封切された。

- (9) 津島美知子「御崎町から三鷹へ」(『太宰治全集』附録第四号、八雲書店、一九四八年一月)
- (10) 原著であるレオン・フラピエ (Leon Frapié) の『女生徒』(『Ecolière』)は、一九〇五年に刊行された。
- (11) 尾崎名津子「待たれる「乞食学生」——『若草』読者共同体と太宰治」(小平麻衣子編『文芸雑誌「若草」 私たちは文芸を愛好している』)では、本作以前に『若草』へ掲載された太宰作品の読者感想を提示し、「雌について」、「喝采」での不評を経て、女性独白体の「葉桜と魔笛」で好評を獲得、「若草」読者に「若さ」というテーマが好まれるという勘所をおさえて本作を描くに至ったという過程が明らかにされている。また、同論では、「乞食学生」に対する読者感想が全てリスト化されており、本作が『若草』読者たちに歓迎されていた同時代状況を一覧することができる。
- (12) 『若草』第一六卷九号(一九四〇年九月、一三〇頁)
- (13) 『若草』第一六卷九号(一九四〇年九月、一三一頁)
- (14) 『若草』第一六卷一〇号(一九四〇年一〇月、一三三頁)
- (15) 「小さすぎる制服制帽に下駄ばきといふ苦学生の恰好」(三六〇頁)、「自分のたいへんな、苦学生の姿」(三七六頁)
- (16) 太宰は『津軽』(小山書房、一九四四年一月)、「恥」(『婦人画報』一九四二年一月)といった他作品においても、実際の貧富に関わらず「乞食」という語をみずほらしい容姿という意味で用いている。
- (17) 『婦人画報』一九四〇年三月
- (18) 『アルト・ハイデルベルク』は、W・マイヤー・フェルスターの作の戯曲(五幕)で、一九〇一年にベルリンにて初演された。戯曲は、一八九八年に発表されたフェルスターの小説『カール・ハインリッヒ』(Karl Heinrich)を基に作られた作品である。日本では、一九一三年に有楽座で文芸協会によって初演され、以降一般的にも知名度を高めた。映画評論家の岩崎昶は、『映画が若かったとき』(平凡社、一九八〇年)において、日本に持ち込まれた「アルトハイデルベルヒ」が「翻訳劇というよりも、むしろ日本の創作劇みたいに身近な受けとめられ方」で「大ヒット」したと述べ、「新劇ファンならずとも、たいいていの人が、たと

え舞台そのものは見なくても物語はそらんじている。」(二二九頁)とその流行を語っている。

- (19) 太宰が参看したのは、番匠谷英一訳の『アルト・ハイデルベルク』(岩波書店、一九三五年)であると推定されている。番匠谷訳のタイトルが「ハイデルベルク」であるにも関わらず、本作において「ハイデルベルヒ」と表記されている理由について、九頭見和夫が次の三つの可能性を示している。「当時超人気を博した演劇の題名が「アルト・ハイデルベルヒ」であった」ため、「尊敬する森鷗外」がドイツ語の「g」の発音を「ヒ」と訳して「おりその影響を受けたため」、「太宰特有の音感で、「ハイデルベルク」より「ハイデルベルヒ」の方がよいと判断した」ため。(『太宰治の「乞食学生」と外国文学』『福島大学教育学部論集』第七一号、二〇〇一年二月、三六頁)
- (20) 『青い花』一九三四年二月
- (21) 『太宰治全集第三卷』(筑摩書房、一九八九年、一五二頁)
- (22) 注9に同じ
- (23) 本名有明淑子。太宰作品の愛読者であった彼女は、「昭和十四年の一月頃」(注9に同じ)に太宰の下宿宛てに自身の日記を送った。日記は、「昭和十三年、有明淑子十九歳の時」(『太宰治全集第二卷』筑摩書房、一九八九年、四五八頁)に書かれたものである。
- (24) 文藝春秋社、一九四一年七月
- (25) 生活社、一九四五年一月
- (26) 筑摩書房、一九四五年一〇月

【付記】本文の引用は全て『太宰治全集第三卷』(筑摩書房、一九八九年)による。引用に際しては、基本的に旧字を新字に改め、ルビ・傍点等を適宜省略した。引用文中の／は改行を示す。